

第5章 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

昨年度の研究は、いじめを起こす重要な要因の一つである人間関係の希薄化に焦点を当てた中・長期的対応である。希薄な人間関係を改善するために、児童生徒相互の人間関係を深めることが重要であると考え、よりよい人間関係をつくるための集団アプローチとしての構成的グループ・エンカウンターを実施し、人間関係の深まりについて検証したものである。

今年度は、昨年度の研究を基盤に、信頼関係の深化に焦点を当て、よりよい人間関係づくりに有効である集団アプローチとしての構成的グループ・エンカウンターおよび、ロールプレイングを実施し、人間関係の深まりについて検証をしてきた。

さらに、いじめ問題解決の方策を探るためにピア・カウンセリングを実施し、いじめ問題解決の有効性について検証してきた。

文献研究、調査研究、実践研究から分かったことをまとめると、次のようなことである。

文献研究から分かったこと

- いじめの起こるメカニズム（背景、要因、歯止めの欠如）について
 - ・ 背景としては、人間関係の希薄化、欲求不満を作り出す環境、本人の性格傾向が考えられる。
 - ・ 要因としては、欲求不満からのいじめ、攻撃の模倣からのいじめ、心の二面性からのいじめが考えられる。
 - ・ 子ども自身の歯止め、集団による歯止め、権威ある者からの歯止めが欠如している。
- いじめ問題への中・長期的対応としては児童生徒相互の人間関係づくりに焦点をあて指導・援助をしていくことが重要である。そのためには、人間関係づくりの基礎となる概念（自己理解、自己開示、他者受容、役割遂行、信頼感）を高めることが重要である。その方策として、構成的グループ・エンカウンターが有効である。また、ロールプレイングを通して、仲間との相互関係、信頼関係を深め、望ましい仲間意識を育てることができ、人間関係を改善するのに有効な手段と考えられる。
- いじめ問題解決のために、お互いが悩みや苦しみを相談できるように相談体制を整備することは、お互いに「助けた」「助けられた」という満足感と開放感が味わえ、お互いの人間としての理解、相手への配慮、相手を尊重する態度などを養うことができ、いじめ問題に対する意識化が図られ解決の方策として、ピア・カウンセリングは有効であると考えられる。

調査研究から分かったこと

- いじめ経験の有無（クロス集計による4分類）による意識の差についていじめ経験の有無による意識の差はあまりみられない。
 - ・ いじめの原因や背景として、子ども同士の間関係、望ましい親子関係や児童生徒と教師との人間関係が希薄であり、ストレスがいじめに大きくかかわっているという意識が明らかになった。
 - ・ いじめの解決には、何でも話し合える友人関係を築き、悪いことは悪いと言えるようになるなど児童生徒同士の間関係の改善が必要であると児童生徒及び教職員が考えている。

- いじめる理由として、児童生徒のいじめ経験の有無にかかわらず、いじめを「遊び半分でふざけている」、「相手が嫌いだ」という感覚でとらえていることが分かった。
 - いじめられる理由として、「自分の意見をはっきり言えない」とことと「悪いことは悪い」と言えない姿が浮き彫りになった。
 - いじめを見ている理由として、「かかわりをもたたくない」「自分がいじめられたくない」など自己中心的な考えでいじめを見ている傾向ある。
 - いじめられたら相談するかでは、担任に相談する割合は極めて低い、友達に対しては相談する割合が高い。
 - いじめを見たら相談するかでは、「いじめられたとき」よりも「いじめを見たとき」の教師に相談する割合が高い。
- いじめ経験の有無（クロス集計による2分類）による意識の差について
いじめ経験の有無による差はあまりみられない。
- いじめを様々なストレスや自分の気持ちのはげ口として行っている児童生徒が多いことが分かった。また、いじめられる児童生徒の内気な性格の面が見えてきた。
 - いじめられたら相談する割合が、いじめ経験「有」の児童生徒が低かった。しかし、児童生徒はいじめられた場合やいじめを見たとき「友人に相談する」割合が一番高いことから、気軽に相談できる相談体制づくりが必要である。
- 教職員の経験年数による意識について
- 経験年数の少ない教員は、いじめに対して個人還元主義、つまり児童生徒の個人の中に問題傾向を見いだし、経験年数の多い教員は、人間関係のつまずきとしていじめをとらえて解決していこうとする傾向が見られる。

実践研究から分かったこと

- いじめ問題解消に向けての中・長期的対応として、よりよい人間関係を深めるために構成的グループ・エンカウンターやいじめ問題を視野に入れたロールプレイングを実践することが効果的である。
- いじめ問題の解消を目指すためには、児童生徒相互のよりよい人間関係を深めることが重要である。そのためには、自己理解、他者理解をを深め、自己表出力、他者への配慮を高めていくことが大切である。
- ロールプレイングによって、特定の役割を演じたり、役割を交代して演ずることにより、他人の立場を理解すると共に、自分の立場を理解し、自ら律する態度を育てるのに役立つ。また、ロールプレイングを通して、仲間との相互関係や信頼関係を深めることができ、人間関係の改善を図るのに有効な手段である。
- ピア・カウンセリングを実践するために、事前に行った生徒による傾聴訓練等の研修及びピア・カウンセリングの実践は、いじめ問題について生徒が真剣に考える機会となり、解決ばかりでなく未然防止にも有効である。
- カウンセラーの生徒たちは、訓練と経験から傾聴することの大切さばかりでなく、他人の立場に立って考えることや思いやる心の大切さなど得るものが多かったようである。

(2) 今後の課題

- いじめ問題についての教職員の意識の向上やいじめられている児童生徒本人や保護者の立場に立った指導と全校での指導体制が必要であると考えられる。
- 構成的グループ・エンカウンターやロールプレイングを通して人間関係づくりの改善が図れるように集団アプローチを試みてきた。今後、さらに、計画的に実践できるようにするため特別活動や道徳及び各教科の中での位置付け（特にグループ学習）の工夫が必要であると考えられる。また、各学校での構成的グループ・エンカウンターエクササイズの紹介やロールプレイング実践のための研修も必要になってくるものと考えられる。
- 同一学年内での実施したピア・カウンセリングの実践を、より活発なものとするための多様な方策と学年の枠を越えた学校全体に広めていくための実践計画の検討が必要であると考えられる。
- ピア・カウンセリングの実践は、全国レベルで見てもかなり少ない。このピア・カウンセリングを他の学校に広め実践研究をしていくことがいじめ問題解決のためにも必要である。また、発達段階に応じた（小学校・中学校・高等学校）ピア・カウンセリングの実践の研究が今後進められるべきであると考えられる。